

【翻刻】『類題稻葉集』秋部

**渡邊 健

概要

前々稿（【翻刻】『類題稻葉集』序・春部）『米子工業高等専門学校研究報告』第五六号、令和三年三月）、前稿（【翻刻】『類題稻葉集』夏部）同第五七号、令和四年三月）に引き続き、『類題稻葉集』秋部四〇七首を翻刻・紹介する。本書には近世の鳥取の歌人の和歌が広く収められており、幕末の鳥取における地方歌壇の活動を知る上で有益な資料である。

凡例

- 一 底本には、米子市立図書館所蔵『稻葉和歌集』上巻（整理番号 Y91・I27・1）を用いた。
- 二 翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。
 - 一 歌頭に算用数字で和歌の通し番号を付した。
 - 二 読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。送り仮名を補った場合は、その仮名に傍点を付した（例 原文「立そむる」↓翻刻本文「立ちそむる」）。
 - 三 仮名の表記は現行の字体により、「ハ・ニ・ミ・ノ」等の片仮名表記も平仮名に改めた。また、歴史的仮名遣いと違うところは原文のままとし、「(ママ)」と傍記した。
 - 四 漢字の表記は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（「嶋・浪・湊」などはそのままとする）。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（「此」「哉」「也」など）。
 - 五 読みが難しいものに限って、最小限、漢字または漢語句の右傍に（）を付し、平仮名で読みを施した。
 - 六 繰り返し記号「ヽ」「ヾ」は原文のままとしたが、濁音はそれぞれ「ゞ」「ぢゞ」で表記した。
 - 七 合字「よ」「ろ」は、それぞれ「こと」「より」に改めた。
 - 八 翻刻の都合上、題・詞書は底本の記載形式に関わらず、和歌より二字下げとした。序文や詞書等の文章には句読点・鉤括弧等を付し、改行は私意で改めた。
 - 九 不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。底本の誤脱と思われる箇所については、稿末の【翻刻付記】に私見による改訂案をまとめて記している。
 - 十 丁付は、各丁片面の終わりに「」を付し、その下の括弧内に丁数と表裏（オ・ウ）を記した。
 - 三 本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、翻刻の掲載をご許可いただいた米子市立図書館に感謝申し上げます。
なお本稿は、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「近世後期の鳥取の和歌に関する資料調査と総合的研究」（課題番号 20K00359 代表・渡邊健）、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」（二〇二二～二〇二四年度、代表・田

中則雄)による研究成果の一部である。

【翻刻 『類題稻葉集』 秋部

秋部

立秋

824 夕まぐれそことさだめぬ浮雲のかげにほのめく秋の色かな 保合

825 秋と思ふ心に音やかはるらんきのふも吹きし荻の上風 盲人江鶴

826 きのふまで知られざりつる我が袖のかるさおぼえて秋はきにけり のぶ子

827 大空に西ふきあげて行く雲の早くもかはる秋の色かな 幸英

828 きのふみし花さへよそになりひさごゆらぐも涼し秋のはつ風 宣甫

禁中立秋

829 とりはてぬ節折(よせり)の竹のつかのまに桐の御壺は秋風ぞ吹く 治堅

都立秋

830 大ひえやをひえおろしも声たてゝ告ぐる都に秋ぞ入りたつ 惟成

海辺立秋

831 いつのまに秋立ちそめて礪山の松さへ波の音にしむらん 宜徳

立秋雲

832 にし山にけふ立ちそむる村雲の姿よりこそ秋は見えけれ 有信

幽栖秋来

833 杉の葉の滴も絶えぬ草のとうたて吹きたつ秋の初風 貞之

山家秋来

834 有りどだに世には知られぬ草の庵露をしるべに秋はきぬらん 安章

山家秋来

835 きのふかも花やにほふと尋ねこしかた山ざとに秋かぜぞふく 鳳鳴

閑庭秋来

836 一むらの庭の蓬におく露のかぞふるばかり秋は見えけり 俊民

初秋

837 麻手ほすつゝみづたひに吹きにけりまだ一すぢの秋の初風 茂信

838 うつり行く空のけはひもたゞならで露にこぼるゝ秋の色かな 保合

839 あし垣の八束たり穂の稲葉人貢いそしむ秋はきにけり 治堅

初秋風

840 いつしかと袂すゞしく吹く風にかなしき秋の果てをこそ思へ 養

841 ふくかぜの心むなしくうごかすやかならず秋の始めなるらん 淇園

初秋月

842 初秋の月のかつらの薄もみぢいつかちしほに照り増さるらん 三蔭

843 かぜこゆる桐の葉ふかし三日月のかなしき影も落ちかゝりつつ 保重

秋入人意

844 とひなれし柳がもとをわするゝや秋の心の始めなるらん 季尚

残暑

845 西こそと思ひの外に秋つはの衣手とほし照る夕日かな 年平

七夕

846 秋浅き野路のえだ川水かれて萩をる袖にちる露もなし 衡

847 立ちわかれいにけん去年の朝より待ちしこよひぞ星合の空 豊秋

848 こひてへば一夜のせさへ世の中の名に立ちわたる天の川浪 信甫

849 天地とゝもに久しき中なれば年のひとよも何かまねなる 武義

850 天の川ひと夜をちよの波枕いかで思ひの残らざるべき 隆麿

851 今夜とてうち橋わたす天の川いくせに積もる思ひ成るらん 重尚

七夕霧

7夕霧

7夕霧

7夕霧

852 こよひしも星のあふせの雲となり雨ともなるか天の川霧 久鎮

七夕渡

853 ひとよせのうきせは絶えて天の川安のわたりは今よひ成るらん

上田千代女

七夕歌

854 うしとのみ思ひなれにし彦星もけふは心の駒いさむらん 治堅

七夕管弦

855 糸竹のひとよに千よの音をこめて星の手向けととりや明かさん

豊秋

「(四二才)

七夕後朝

856 とけてねし一夜も夢とながるめり今朝のうきせの天の川浪 周道

857 さゝのはに朝風みえてちる露は別るゝ星の涙なるらん 政芳

閏月七夕

858 文月のくはゝるかひも中／＼に来ん年遠く星や侘ぶらん 豊秋

霊祭

859 はかなしな何ぞは露の玉祭たのむも薄き蓮の台は 季尚

草花

860 名もしらぬを草も秋の花数にもれぬや野べの盛りなるらん 弘範

861 一色に心とむなと秋の野の千ぐさもゝ草花は咲くらん 村岡

雨中草花

862 きてみればを花がたもと萩が袖ふりもまがはぬ雨の色かな 春彦

女郎花

863 露にこそ打ちとけぬらめ女郎花しとゞにぬれて何みだるらん

里餘子

864 うちしめり夕露むすぶませのうちに人待ちがほの女郎花かな

千代女

萩

865 みな月の照る日にふかばうき物と思ひもいれじ萩の上かぜ 茂之

866 なぐさめん秋の花野と成りもせであはれもしらぬ風の萩原

平井清澄

「(四二ウ)

867 ひたぶるにうしともきかずよひ／＼に絶ゆればさびし萩の上風

いく子

868 吹く風の色とはなしに萩の葉のさやくかたより秋は見えつゝ 宜行

869 ぬるまのみ秋の思ひの絶えまにて覚むればかなし萩の上風 貞喜

雨中萩

870 ふる雨の声にまじりて終夜起きふししげし軒の下萩 いく子

871 山住みの心にあまる淋しさは萩の上こそすかぜぞしるらん 有信

萩

872 よきて吹くかぜの心もみゆるまで露なつかしき庭の萩原 正純

873 露結ぶをじかの床も明けがたの嵐にぬれて真萩ちるなり 守前

874 あだにのみ結ぶとしらでよひ／＼の露にひもとく萩が花妻 道何

875 いっしかと野守のかぐみ秋さびて影みし真萩ちりかかりつゝ 茂之

876 かり衣裾野を行けば白露にぬれて移ろふ萩が花摺 石原儀一

幽栖萩

877 さをしかのかよふばかりの道はあれど垣生の真萩折る人もなし

安歌

878 真萩さく野路の玉川かぜこえて秋にせかるゝ水の色かな

「(四三才)

河辺萩

879 露わくる鹿もこよひは心せよ月をやどせり萩が花妻 久鎮

月前萩

880 月ながら袖をすらん秋萩の笹はよるの錦ともなし 奥田年足

881 萩露
 置きわたす露もおのれと色かへて花に移ろふ庭の萩原 中村誠胤
 882 萩風
 こゝろせよ色なる露のちるもをし花も盛りの萩の上風 こん女
 名所萩
 883 高まどの野べの古道中絶えて露にうちふす秋はぎの花 隆磨
 薄
 884 旅人の友よぶ野べの秋かぜにひまなくまねく花すゝきかな 俊彦
 885 秋風に淋しさまねく種ぞとも知らで植ゑつる庭の小薄 弘範
 886 夕あらしたゆぶかた野の糸すゝきしのびくゝに露結ぶらん 豊秋
 ある人のもとより薄を根こじて送りこし侍りけるに
 887 ひともの玉のをすゝき植ゑ置きて月を宿さん袂にぞかる 有信
 葛
 888 真葛原身にしむ頃の秋風にうら葉の露もかつこぼれつゝ 貞宣
 朝顔
 889 咲きかへてさかり久しき朝顔も露よりあだの名にはたてつゝ 政兼
 露ふかきしのび車の別れ路にひとり紐とく朝顔の花 淇園
 890 月影にかぞへしよりも数そひて籬にあまる朝顔の花 俊民
 891 いづる日の光にみれば八千草の露よりけなる朝顔の花 周道
 892 朝がほの花に思へば萩のかぜうれしく夢を覚ましつるかな 治堅
 893 若竹によるべさだめて咲きにけり千代をやたのむ朝がほの花 実成寺日孝
 894 此のねぬるあしたの露の朝がほは明けがたにこそ紐解きにけれ 民子
 朝がほの花見に来よと人のいひこしけるにつとめて

896 朝がほの花に心をうつしつゝ露も紛はぬよはの手枕 貞喜
 前栽のあさ顔今さかりにやなど人のいひけるに
 897 朝なく咲きかはり行く花ばかりさかりしられぬ物は有りけり 惟成
 月草
 898 つき草の花はめづとも吾妹子に衣すりてはきせじとぞ思ふ 淇園
 899 袖ふれん人なきませの月草も移ろふ名のみ露にたてつゝ 貞之
 900 大空の色に匂ひて置く露のひるまも清き月草の花 英光
 藍花
 901 下葉のみもとの心の色見えて薄くれなるの花咲きにけり 古樹
 露
 902 秋といへば草葉よりけに先づぞおく袂や露のやどり成るらん 竹内周敷
 903 吾がせこを見そめが崎の夕露に衣手ぬらし行くは誰が妻 久鎮
 904 夕霧の絶えずたな引く松かげに落つる雫もかぞへられつゝ 秀保
 905 鳴くむしのなみだや雨とそゝくらん草葉にあまる野べの夕露 奥多昌之
 906 ながめやる軒ばの草の夕露にいつしか置けるわが心かな 宜徳
 907 浅ぢふのをのゝしの原明けそめて露にあまれる有明の月 幸英
 898 更け行けば風にしぐるゝ露みえて軒ばにそゝく月の影かな 縁
 899 夕されば草むらごことに置きそひて月の光も露ぞみせける 武義
 思ふこと有りける秋の頃
 900 袖のうへに置かぬ日もなき夕露を木草の秋と思ひける哉 賤子
 虫

911 露じもの秋を■となく／＼もかれなん虫の声のかなしき 年平
 912 吹きわたる風の行くへにみだれけり露をたぐひの松むしの声 英光
 913 をすゝきを片糸によりて藤袴ぬふとや野べにはた織のなく 佐伯弓束
 914 はしゐして月待つほどの手枕にやゝ聞きなるゝ虫の声かな 多田俊親
 暁虫
 915 妹まつとながめし月は明けぬれど猶なごりある虫の声かな 周道
 916 暁の嵐にたぐふ虫の音や物思ふ宿の露とちるらん 茂信
 夕虫
 917 夕月の影落ちかゝる袖がきに露よりしげき虫の声かな 周道
 夜虫
 918 露結ぶ窓の笹生の虫の音によぶかき月の哀をぞみる 峻徳
 月前虫
 919 窓近くはた織る虫の声更けて衣手さむし秋の夜の月 広滋
 920 月清き芳生の露ふく秋風によすが定めぬ虫の声かな 秀保
 921 吹きたゆむ嵐のあとの月きよみをさゝにかへる虫の声かな 茂信
 閑居虫
 922 松むしの声のかぎりをつくしても浅ぢが月をとふ人はなし 清彦
 923 門さしてなしとこもれる我が園に心なげなる待つ虫の声 信甫
 924 かくれがの庭のいはほの中にすらうきことあれや虫のわぶなる 三蔭
 故郷虫
 925 鳴くむしのすみかとあれて故郷の笹は露のあとだにもなし 保合
 926 とはれつる秋さへいつの故郷と思ひも捨てぬまつ虫の声 徳栄
 旅宿虫

927 さむしろの夜半の枕にこほろぎのなく声きけば旅ぞかなしき 以貫
 928 旅人の駒ひき過ぐる 駅路(うまぢ)にけふもくれぬとすゝ虫の鳴く 保信
 行路虫
 929 行きなやむ垣根の道の朝露にこぼれても鳴く虫の声かな 保合
 虫声入琴
 930 妻琴にかよふ風よりあはれもおなじ名におふ松むしの声 長秋
 虫声幽
 931 浅ぢはら露よりけなる声す也何を常盤の松虫の名ぞ 祐之
 932 駒とめし草の青葉に霜ふりて消えぬばかりの鈴虫のこゑ 宜行
 秋のうたよめる中に
 933 かしましと昔はいひし虫のねの聞こえぬ身とも成りにけるかな 淇園
 934 身よそに聞きすてがたく成りにけり月更くるよの松むしの声 秀実
 935 真萩原けふきてみればさをしかの恋の盛りに早成りにけり 喜蔭
 秋風
 936 いなば山宇倍の三室の松風も秋にはあへず吹きかはりつゝ 広滋
 937 心なき草のうきはも音たてゝ夕べあはれの秋風ぞ吹く 信睦
 938 朝まだきさゝめかる子が袖ぬれて秋風寒しをのゝしの原 周道
 939 日ぐらしのなくねも雲に埋もれて秋かぜなびく夕ぐれの山 宏年
 940 きふこそはしゐの友と待たれしかものうく成りぬ松の夕風 知運
 941 袖の露ちらすとみれば心よりおくれかよふ秋の夕風 信甫
 942 うづらなくかた野に放つ箸鷹の小鈴もゆらに秋風ぞ吹く 潮

943 水辺秋風
真萩ちる山下水のくらしきせに色あはれなる秋風ぞ吹く
稲妻
周道

944 ありと見て有るにもあらず石の火にたぐふばかりの稲妻の影
隆磨

945 秋夕
さびしさはいづこもおなじ夕暮と身にしるばかり秋風ぞふく
利恭

946 おほかたは見なしがらなる野山ぞと思ひ捨てても秋の夕ぐれ
秀雄

947 秋かぜのうたて身にしむ夕べかな雁のなみだや袖に置くらん
秀子

948 ながめ侘びぬ （マ） のころを飛ぶ鳥の翅にかけていづちやらまし
治久

949 朝顔のあしたの花のよそほひも空にきえ行く秋の夕暮
森寿子
「(四六ウ)

950 山家秋夕
柴人は空にながめてかへりけりわが住む山の秋の夕ぐれ
広滋

951 文月ばかり山寺にまかでける道にて
そよと吹くすがたは萩にかよへども稲葉の風は物うげもなし
信甫

952 霧
峯たかく出づる日影はさやかにて禁をめぐる秋の朝霧
有恒

953 雨はるゝ我が高槻の雫よりみやりのさ霧色おもりに行く
秀雄

954 晴れぬとも降るとも見えず霧こめて夕べ物うき秋の空かな
英光

955 けふも又松のしづくと成りやせん朝日をさふる秋の山霧
幸英

956 曙山霧
かの山の松のは埋む霧の上に月影落ちぬ夜や明けぬらん
俊民

957 海辺霧
あしやがた霧も乱るゝ汐さみに絶えぐみゆる沖の友舟
貞宣

河上霧

958 こえて又やどり ■ んもおぼつかな夕霧ふかし関の藤川
潮

959 かはしまは霧の絶えまにみえ初めて水音遠き朝朗かな
古樹
「(四七オ)

960 梶の音は空に聞こえて朝霧の中に落ちくるうぢの柴舟
堀幸子

961 田家霧
鳴子ひく音のみもれて村雀たつや門田は霧こもりつゝ
祐之

962 さらぬだに長きをわぶる秋の夜の田ぶせは霧に明けおくれつゝ
治久

963 山路霧
それをのみたよりにこえんくらぶ山霧の底なる谷川の音
梶浦政忠

964 秋の哥の中に
あらし山霧の雫も松風の色に流れて雨晴れにけり
茂信

965 鶺鴒
はし鷹のとやのゝ鶺鴒かり人の帰りし跡の月になく也
俊民

966 壮夫（ますらを）の小鷹はなちしあとなれや尾花みだれて鶺鴒なくなり
重尚

967 をがや原露よりのぼる夕月の影ゆらぐまでなくうづらかな
重矩

968 小鷹狩
秋霧にぬるゝもしらで狩りくらし更に驚く萩の夕露
芳蔭

969 吹きすさぶ風はやぶさの手放れに埒のゝ真萩袖にちる也
俊親

970 鳴
散りのこるこなきが末をたつ鳴の羽音もさやに川風ぞ吹く
宜徳
「(四七ウ)

971 夕日影うすき門田の秋風に鳴の羽音もまぎれざりけり
鳳鳴

972 ひとりゐて声たてつべき夕べかな鳴なく野べの三か月の影
周道

973 衣うつ賤は心もなかるらん鳴たつ野辺の夕ぐれの宿
宏年

八月ばかり物へ行くみちにて

975 974 柳ちる大川のべの夕附日まばゆきかげに秋つ飛ぶなり
秀実
をとめらが綿つむ袖や寒からし雁がねみだれ時雨ふりきぬ
秀奥
雁

976 安からぬ初かりがねぞ聞こゆるなる時雨の雲やいくへ分けける
年平
977 つらねこし数こそ見えね白雲の上に音して雁わたる也
淇園
978 遠つ人待つとはなしによまるゝは今朝めづらしき雁の玉章
英庸
979 村雨も北ふく風にたぐひきてかりがね寒き夕まぐれかな
武彦
980 遠かたの雲は風に結ばれてなゝめに雁のなきわたるなり
保合
┌(四八才)

981 穂波よるあら田の里の夕かぜに青嶋づたひ雁ぞ鳴くなる
周道
982 手枕に声こそ落つれいく里の夢路を分けて雁はきつらん
知足
983 うき霧の一むらなびく朝北を翅にしめてかりはきにけり
嘉道
薄暮雁

984 天の原いづこを宿と契るらんかりがね早し夕ぐれの空
嘉則
月前雁

985 月清しゆき見まほしき白山も思ひけちてや雁はきにける
治久
986 山窓の月にをさゝのかぜ見えて枕もさやに初雁ぞなく
保信
田上雁

987 朝なゝ雁ぞ鳴くなるを山だの早穂波寄る秋風の上に
守前
関路雁

988 をりしもあれ秋霧深み初かりの名のりてこゆる朝倉の関
芳蔭
海辺雁

989 入日さす沖の島まに数みえて波ちの雁は今ぞ来にける
恒安
990 すみなれぬあしべ尋ねて中空の霧にたゞよふ初かりの声
知運
991 みなと風雨に成りぬと舟人のさわぐ夕べに雁わたるなり
隆磨
長月なかばまで雁の声きこえざりけるとし
┌(四八ウ)

992 わが宿の菊は匂ひぬいづこにかことしは雁のふみたがへけん
守前
993 秋の哥の中に
政兼
初かりの鳴きてわたりし夕べより大山しろく雪降りにつけり
駒迎

994 あふ坂やこえ行く駒のゆふかみに手向の神も心ひくらし
安歎
月

995 山松にさわぐ嵐の上こえて雲なき空に月ぞのぼれる
豊秋
996 見るからにことぞともなく袖ぬれてあやしき物か秋の夜の月
治堅
997 あらし吹く浅茅が露も更けにけり月の落水ちるこゝちして
祐之
天のはらうき雲がくれ鳴くかりの羽かぜにはるゝ月の影かな
前田理世明

998 みちてかけかけてはみてる世の中の人をあはれと月はみるらん
有信

1000 とくさ原わたる嵐にみがゝれてこぼるゝ露は月に成りつゝ
潮
1001 見るまゝにかなしき増さる秋の月かつらの露や袖にしむらん
貞宣
┌(四九才)

1002 雲払ふ軒の松かぜしづまりて思ひしまゝの月は出でにけり
宥看
1003 吹く風にやがて散り行くしら雲は月のかつらの花とこそみれ
秀奥

1004 物思ふ秋のこゝろをしばらくは空になしてもみつる月かな
知良
1005 心有りて軒ばの桐は散りにけりいそぎな更けそ秋の夜の月
西尾ため子
待月

1006 海の上に待つよも月の遅きかな波のあなたに誰をしむらん
治堅
1007 雲まよふ嵐の末に行くものは月待つよひの心なりけり
鳳鳴

- 1008 心あてのまつはさ霧に埋もれぬいづこのくまに月はまたまし
宣雄
- 1009 いたづらに飛びかふ雁の声更けて月にあからむ山のはもなし
発明
- 1010 月出山
このくれのやみもあらはに成りにけり出でつる月の跡の山のは
里餘子
- 1011 昇月
むさし野や入日まねきしを薄の袖より出づる秋の夜の月
守前
- 1012 夕月
村雀ねぐら争ふ竹むらのひまあらはれて月は出でにけり
茂之
- 1013 八月十四夜
望(もち)のよを明日とへだてん雲もなくこよひも月は盛りなりけり
知運
- 1014 八月十五夜
思ふよりとくこそ山は出でにけれ月も今夜の暮や待ちけん
武彦
- 1015 十五夜団居して
ことの葉の花もみるべきよ半とてや筆の林に月は照るらん
以貫
- 1016 おなじ夜或る方へものしけるに、霄のいとくもりたるが、後晴れ
ければ
よひのまの雨をかこちて打ちもねば悔しかるべき月の影かな
治堅
- 1017 十六夜
巻きあぐる窓のすだれのひまばかり隈あらはるゝいざよひの月
信庸
- 1018 同じ夜、いとさやかなる月に窓ちかく文をひろげて
夏虫も雪もあつめぬ窓ながら月の光にふみをこそよめ
九月十三夜
武宮貞稠
- 1019 月の音もかるゝこよひの初霜にひとり秋なる月の影かな
深夜月
喜蔭
- 1020 月も今は葉末たづねて重るらしさやかに成りぬちふの露原
祐之
- 1021 いたづらのよはのね覚めと思ひしを心ありける窓の月かな
暁月
久忠
- 1022 ふくろうの声のなごりと成りにけり森の木の間の有明の月
有明月
茂之
- 1023 待ち出でし月は雲間にしらめどもいまだよぶかき峯の松原
雁がねの音づれ捨てししのゝめの枕に薄きまどの月影
月欲入
尊信
- 1024 をしめどもかたぶく山のあなたには又わがごとや月を待つらん
惜月
淇園
- 1025 影きゆる月の行くへは見るもうし暁こめて霧よたゝなん
隣月
久忠
- 1026 露の色松のあらしの音にさへ月をあはれといはぬよぞなき
残月懸峯
村岡
- 1027 秋かぜの露吹きわけし跡みれば高嶺にかゝる在明の月
連夜見月
淇園
- 1028 誰ならぬ月にも塵やつもるらんねぬ夜重ぬる床のさ菫
玩月
春彦
- 1029 数ならぬ身さへ心のみがゝれて月の鏡に向かふよはかな
依月待客
豊秋
- 1030

- 1031 高殿の南の松はきりすてつこよひの月をとふ人もがな 守前
「(五〇ウ)
- 1032 月千秋友
千年まで契る心のさやけさに月も友とや我を思はん 淇園
老後月
- 1033 わびつゝも老いをば何になぐさめん月みる秋の有る世ならずは 真純
雲間月
- 1034 初雁の鳴きしやいづら出でてみれば雲まの月に秋風ぞふく 陳修
雨後月
- 1035 かきくれし雨におくれてしら露の玉しく野べに月は出でにけり 年平
- 1036 村雨をしばしよきつる松かげに思ひの外の月をみるかな 義以
- 1037 宵の雨のなごりこぼるゝ竹のはの葉にぬれて月は出でにけり 守前
霧上月
- 1038 薄霧の立田の山の夕月夜もみぢの秋も臙ろなりけり 義明
月の歌とてよめる中に
- 1039 露ふかき軒ばのいよす巻き上げて雁なくよはの月をみる哉 周道
さゝがにの糸のみだれにちる露をよすがともなくすめる月かな 政喜
- 1040 はしたなき草の庵にもやどりきて月はうき世にすみわたるかな 豊秋
月不撰処
都月
「(五一才)
- 1041 宮人のしのびわたりのを車のうちまで照らす秋の夜の月 将貴
山月
- 1042 今はまだ誰が庭松にさはるらんはなれ果てたる山のはの月 信庸
吾妻の旅居にて月のさやかなる夜
- 1043 いなば山高嶺の松の影ばかり心にうかぶよはにも有るかな 守雄
野月
- 1044 萩わくる野べのをじかのうは毛にも露をよすがに月ぞ宿れる 恒安
- 1045 吹くかぜは露によりてかた岡の薄に置ける月の影かな 衡
岡月
澗月
- 1046 霧まよふ岩垣淵にみえ初めて杉よりうへに月は出でけり 年平
行路月
- 1047 さよ更けてひとりかへれる家路にもかげをともなふ月は有りけり 季尚
- 1048 水の音は嵐に更けて川上の松原遠く月は出でにけり 貞宣
水辺月
河月
- 1049 とほしろく月も流れて芳野川やなせのさ波秋たてにけり 周道
- 1050 山川の岩がねそゝき行く水の音にかよひてすめる月かな 光郷
「(五一ウ)
- 1051 山姫の月にさらせし瀧の糸はいつの秋をか待つに染むらん 信甫
海上月
- 1052 青雲の向伏すかぎり照る月やはてなき波の果てはしるらん 重矩
夜をこめて浜こぎ出でし大舟の行くへに成りぬ有明の月 茂之
- 1053 かげくれししがの唐崎霧はれて松もあらはに月は出でにけり 俊民
湖上月

1069 1068 1067 1066 1065 1064 1063 1062 1061 1060 1059 1058 1057 1056

池月
風かよふ池の蓮の友ずりに玉とこぼるゝ月の影かな
日孝

船中月
いざ子ども筈とりそなて夜舟こぐ磯山づたひ月は上れり
茂之

島月
高せさす千代の川くまくれ初めて棹の雫に月ぞこぼるゝ
惟憲

旅泊月
千どりなく家嶋遠くね覚めして波にはなるゝ月をみるかな
守雄

旅泊月
いづこともわかぬ浮きねの波枕月より外にしる人もなし
宣雄

水郷月
梶まくらね覚めてみれば月清しいざ筈とりて船よそひせん
宣雄

難波めがきぬたをさそふ秋風に芦の葉分けの月ぞくだくる
弘範

旅宿月
こゝの里かしこの浦の秋の月みし世に似たる旅やどりかな
洪園

引き結ぶ草の枕の露しげみ月も夜すがらあひやどりせり
春彦

田家月
小山田の庵のさゝぶき露更けてひまもあらはにすめる月かな
陳修

閑居月
竹のはもなびかぬよはの月影に苔路の露のかぞへられつゝ
鳳鳴

人かげは絶えて淋しき松の戸に今宵もひとり月ぞとひくる
川崎正親

窓月
吹く風のすがたも見えてくれ竹の葉分けになびく窓の月影
俊親

人しれぬ千ゝの思ひを深き夜の窓にあつめてすめる月かな
洪園

1084 1083 1082 1081 1080 1079 1078 1077 1076 1075 1074 1073 1072 1071 1070

庭月
八重むぐら月にさはらぬ庭の面をよな／＼とふは嵐なりけり
清彦

山の家月
山のはをはなるゝ月の清ければさながらくらし庭の松かけ
恩忠

さゝ分ぐる風の音のみさやかにてこよひも月にとふ人はなし
鳳鳴

松風に都の夢はさましてき月にうすれぬ面かげやなぞ
政英

故郷月
昼だにも人かげうとき山まどに此の頃なるゝ秋の夜の月
尊信

ふるさとは筒井のうへもみくさゐて月さへすまず成りにける哉
治堅

旅ねして月をあるじにあかせとは思ひやかけし故郷の空
英光

うら波は遠ざかれども月影の猶すみ捨てぬしがの古里
有信

古寺月
を初せや檜原の嵐しづまりて月に後るゝ鐘の音かな
祐之

宵のまの雲のまよひは空に消えてかはらの松に有明の月
鳳鳴

月照松樹
みと鷺の行くへにきえし川上の松もあらはに月は出でにけり
治堅

さよ中に夜は成りぬらし月影にはなれてひくき庭の松がえ
信甫

草も木もしをるゝ秋の夜頃へて松の常盤になるゝ月かな
徳栄

松間月
行くまゝに松の葉ごしと成りにけりはなれて見えし山のはの月
茂之

樵夫帰月
真柴こる嶺の柚人くれぬとて下ればのぼる秋の夜の月
是満

竹間月
人しれぬ千ゝの思ひを深き夜の窓にあつめてすめる月かな
洪園

1085 うち思ふわが一ふしももらせとや竹の葉分けに月はすむらん 春彦
 月前雲

1086 むら雲は音にけたれて山松の風よりはるゝ秋の夜の月 祐之
 月前風

1087 吹く風に雲の八重波静まりて安くも行くか月の御舟は 宣甫
 月前松

1088 人の世のかはるも知らで峯の松いくその秋か月になれけん 隆麿
 月前露

1089 月影もあだなる露にやどる夜は思ひ乱るゝ物にこそなれ 安歎
 月前鳥

1090 月清み横ぎる雁のくまならで千里の外にたつ塵もなし
 月前煙

1091 立ちなびくかの山本の夕けぶり中／＼月に匂ひそへけり 陳修
 月前鐘

1092 秋ふかきよ河の鐘のほがらかに音する時ぞ月はさやけき 洪園
 月前船

1093 水底にたゞよふ雲の波もなし月のうへ行く淀の川舟 信庸
 月前筏

1094 大井川行くせも長き秋のよを月にまかせて下すいかだし 季甫
 月前枕

1095 窓遠くよひまどひするはづかしさ枕のうへを月にとはれて 里餘子
 月前遠情
 一(五三ウ)

1096 くまもなき月の心にさそはれてまだ見ぬ里も思ひやるかな 季尚
 月前幽情

1097 月みればわがみひとつの秋ならで人思はする物にぞ有りける 周道
 月前秋思

1098 人はいさ物思ふ秋の露けさをとひももらさぬ袖の上の月 守前
 人と契り置きて月待つ夕つかた

1099 なすこともなくて暮れ待つ老いが身は秋の日長き物にぞ有りける 洪園
 月あかき夜、小谷古蔭が粟谷なる庵を訪ふとて

1100 待ちいでゝ分け入る谷の松がえにあやしく沈む月の影かな 治堅
 鹿

1101 君が世は秋をかなしぶ山住みもあしと思へばさをしの声^{ママ} 清彦
 君が世は秋をかなしぶ山住みもあしと思へばさをしの声

1102 狩人のさつ夫とならん篠原の露にしをれて牡鹿鳴くなり 茂之
 松のかぜぬれぬしぐれと思ひしをたぐへてけりなさをしかの声

1103 山どりの尾上の薄ほに出でて妻どふ鹿のなかぬ日もなし 知運
 一(五四オ)

1104 夕まぐれ尾上の鐘の行くへより秋風更けてをしか鳴くなり 重明
 妻こふる鹿の思ひもいかならんをのゝ萩原嵐吹くなり

1105 妻こふる鹿の思ひもいかならんをのゝ萩原嵐吹くなり 則行
 声たてゝしかなうらみそ夕べとて汝が身ひとつの秋にはあらじを

1106 声たてゝしかなうらみそ夕べとて汝が身ひとつの秋にはあらじを 周敷
 さびしさをわが夕ぐれとながむれば霧の籬にをしか鳴くなり

1107 さびしさをわが夕ぐれとながむれば霧の籬にをしか鳴くなり 貞喜
 曉鹿

1108 有明のつれなくみゆるまつ山になくやを鹿も今帰るらん 秀興
 朝鹿

1109 有明のつれなくみゆるまつ山になくやを鹿も今帰るらん 秀興
 朝鹿

1110 かた山は霧によごもる朝妻にはなれがてなるさをしかの声 祐之
 夕鹿

1111 夕附日かげもとまらぬ山の端にひとりさまよふ棹鹿の声 英光
 萩のはのそよとばかりも身にしみし夕べの月に鹿ぞとよめる

1112 萩のはのそよとばかりも身にしみし夕べの月に鹿ぞとよめる 則行
 夜鹿

1113 袖の露いづれによりて重るらん夜ぶかき月に棹しかの声 治堅

- 1114 真萩さく岡辺の月にうかれ出でて今夜もきゝつさをしかの声
梅子
- 1115 閑居鹿
はじめみぢ一葉こぼるゝ夕風にをりしもたぐふさを鹿の声 茂明
「(五四ウ)
- 1116 鹿声催哀
なく鹿のなみだもさこそたぐふらめ我が袖おもるよはの秋風 政忠
- 1117 山家鹿
もみぢゝる外山の庵の朝月夜あらしにしづむ鹿の声かな
松浦重恭
- 1118 旧都鹿
いたづらに吹くや飛鳥の秋風も更に身にしむ鹿の声かな 発明
擣衣
- 1119 さよきぬたをりゝ声の乱るゝはまだうら若き妻や打つらん 年平
- 1120 待つ人のうつよとしらで防人はよそのきぬたに袖ぬらすらん 淇園
- 1121 みさしつる夢のなごりにうちそへてきくも身にしむさよ礎かな 守前
- 1122 唐衣うつ音きけば吾妹子が心いられも空にしれつゝ 鳳鳴
- 1123 打ちしきる遠の里わのさよきぬたたゆぶは風のたゆぶ也けり 政忠
- 1124 秋の夜の夢ぢの末にひゞく也うつやうつゝの賤がさ衣 富子
- 1125 天つ雁しきてなく夜のさむしろに秋風たけて衣うつなり 重恭
- 1126 打つ人はたれとしらねどさ夜衣音はね覚めの友と知りつゝ 昌之
「(五五ウ)
- 1127 月前擣衣
今更に音のしきるや入りかたの月におどろききぬた成るらん 重尚
- 1128 うちしきるつちのひゞきに浮雲の袖ほころびて月は出でにけり 将貴
- 1129 更くる夜の空に声ある心地して月より遠に衣うつ也 周道
海辺擣衣
- 1130 から衣妻ふくかぜに難波女が身をつくしつゝ打つはたが為 潮
山家擣衣
- 1131 照る月のかげだにうとき奥山のこのくれやみに衣打つなり 鎮喜
- 1132 秋かぜのうき世の声を身にしめて山の奥にもうつ衣かな 民子
里擣衣
- 1133 音なしの里は名のみ秋風にぬるよもしらず衣打つなり 季尚
遠村擣衣
- 1134 ひとりのみ月にねぬよと思ひしを遠かた人も衣うつ也 茂孝
菊
- 1135 千年にとわが思ふ宿のあまたあれば籬の菊をゝらぬ日もなし 広滋
- 1136 露をだにうちも払はぬ袖垣にこぼれて匂ふしら菊の花 安歎
- 1137 きくの花月と霜とにまがはずは夜もさやけきをみましや 宏年
「(五五ウ)
- 1138 薄霧の籬のきくに月更けて残る夜寒き花の色かな 秀保
- 1139 苗なりし春を思へば飛ぶ蝶の命も千代のしら菊の花 茂之
- 1140 秋の日もやゝくれ竹の袖垣に猶千代こもるしらぎくの花 嘉則
- 1141 しら菊の匂ふまがきに夜は明けぬと思ふは露の重る也けり 幸英
- 1142 露霜の色にかよひて咲きながらあだにはちらぬ白ぎくの花 古樹
- 1143 うゑし時思へば遠き秋を経て此の頃菊の花咲きにけり 隆麿
- 1144 咲きにほふ菊の花園立ちならしあだならぬよの露にぬれつゝ 周道
月前菊
- 1145 しら菊の花の盛りに成りにけり庭にうすれぬ有明の月 有信
- 1146 待ちつけてほのめく月も有る物を菊さへさやかにかをるよはかな 則行

- 1147 雨中菊
そゝがずは月の匂ひもそはましを菊さへねたきよはの雨かな 衡
- 1148 故郷菊
故郷のかきつの菊も此のころの雨にとはれて咲き初めにけり 治久
「(五六才)」
- 1149 窓前菊
あつめては花も霜とや照らさまし文みる窓の庭のしら菊 佐伯香
- 1150 水辺菊
水辺菊
かげしづく細谷川の水底に消えあへぬ霜や白ぎくの花 惟成
- 1151 菊花盛久
菊花盛久
花盛りいそがぬませのしら菊はうゑし春日を心とやさく 治堅
- 1152 京に在りける頃、仙洞御所に植ゑさせ給へる吹上の菊とてある人のもとにかめにさしたるを見て
きくの花いかなる風の吹き上げて雲のうへより匂ひきぬらん
節後菊 政芳
- 1153 きせ綿もとりつる物を心なのあしたの雨や菊の籬に
紅葉 紅葉 貞宜
- 1154 山姫の染木がしるのもる山は今いくしほかもみぢしぬらん 淇園
- 1155 くれ竹のまがきに根はふ蔦かづらひとよの霜にもみぢしてけり 貞宜
- 1156 小ぐら山御幸もしらぬ秋風にむかしこがるゝ木ゝの色かな 春房
- 1157 音たてゝほたきる山の朝風に散りしほいそぐはじめみぢ哉 保合
「(五六才)」
- 1158 さをしかのなく音しぐれし松風の末の遠山もみぢしにけり 周道
- 1159 かし鳥のなく声寒み川ぞひの櫛のはやしは色づきにけり 重尚
- 1160 初紅葉
しぐるともいはでの山の下もみぢ先づひとしほは口なしにして

- 1161 紅葉交松
もみぢばの秋の錦は一むらの松さへあやにおるかどぞみる 季世子
- 1162 松下紅葉
松下紅葉
下もみぢしぐるゝみれば染めかねし松も雫はよわり果てけん 信甫
- 1163 朝紅葉
朝紅葉
日かげさすかた山はたの朝霧にぬれて色そふはじめみぢかな 古樹
- 1164 遠村紅葉
遠村紅葉
ことひなく丹生のさ霧の末はれて紅葉に明くる山もとの里 武彦
- 1165 行路紅葉
行路紅葉
紅葉の下てる陰をたのめればかへさの道は暮れぬともよし よみ人しらす
- 1166 閑居紅葉
閑居紅葉
人目まつすゝのしのやの薄もみぢひとりこがるゝ秋の色かな 茂信
- 1167 水辺紅葉
水辺紅葉
池水の底にうつるふ紅葉もしぐるゝたびに色そはりつゝ 千恵子
- 1168 片淵の岩垣もみぢ色ふかし底のみどりも秋やくむらん 嘉則
- 1169 さくらののみぢ
さくらののみぢ
みよし野や霞は霧に立ちかへて秋のさくらもかげにほふなり 季尚
「(五七才)」
- 1170 山ざとにしはし有りける頃、友だちのもとへ
山ざとにしはし有りける頃、友だちのもとへ
君とはば見せまし物と山里の外面のもみぢをらぬ日もなし 貞喜
- 1171 長月ばかり弓が浜にあそびて
長月ばかり弓が浜にあそびて
軒もせにつみほすわたの雪みても年ある秋のいちしろき哉 古樹
- 1172 秋の末つかた心地そこなひてこもりあける時

1186 うつり行く秋の心の夕露も物なつかしきふる郷の空 治堅

1185 さをしかの声も枕に近づきぬひたの懸(かけは)縄今やひかまし 信庸
故郷秋

1184 思ひいる山の奥にもさをしかの音になく時ぞ人は恋しき 武彦
田家秋

1183 打ちすさぶきぬたの音に山ざとの軒ばのぬるでちらぬ日ぞなき 賤子
草野瑞彦

1182 都人春は花ともみし雲の八重垣寒し秋の山ざと 信睦

1181 とふ人も今はあらしの山陰に椎のみまじり小雨ふるなり 弘範

1180 かくてこそ秋のあはれも見つくさめ月にもなれぬ松かげの庵 宣雄
山家秋

1179 心から結びし庵も秋たけてあまり淋しく成りまさるかな 周道

1178 降りもせで川音たかく成りにけり秋は露にも水まさるらん 豊成
秋川

1177 もみぢ散る夕川のべの薄月夜水の行くへもあはれ也けり 弓束
「(五七ウ)

1176 五百代のをだの晩稲のいなむしろ乱るゝみれば小鳥たつなり 潮

1175 み空行く月も朧ろに霧こめて小雨ふる夜は秋としもなし 賤子
秋田

1174 かけわたすはての稲葉の夕露も霜となるまで夜は更けにけり 潮

1173 夕づく日軒ばに落ちてしら雲の行きかふ空をひとりかもみん 秀保
秋夜

1172 たれこめて過ぐす軒ばの秋の色見るにまさりて淋しかりけり 穰
秋日

1187 もずの鳴くつゝみのはゝそ色づきて夕暮さむし川づらの里 俊民
水郷秋
「(五八ウ)

1188 となみはる田面露けき明けぐれに妻よぶ鳴の声のかなしさ 保合
秋鳥

1189 夕日影てらすも寒き片山の薄霧がくれもずぞ鳴くなる 重恭
秋魚

1190 かつら川やなごす水のひまとめてやつれし鮎は今ぞ落ちくる 鎮喜

1191 散りそめし岸の柳のながればもまじるばかりに鮎ぞ落ちくる 友愛

1192 ふしづくるおどろが下のもみち鮎水の底にも秋をみせけり 瑞彦
秋雨

1193 秋霧のとすればうづむ槇の葉にくたび雨の音をきくらん 治堅

1194 鶉なく栗生のかゝし村雨にぬれてば傘のかひは有りけり 信庸
秋遠野

1195 ほどもなく見えず成りなん夕ぐれの霧にうかべる秋の山のは 良舎

1196 夕げたくよその煙の行くへさへ秋は心にむすばれつゝ 嘉則
暮秋

1197 山かげも木がらし立ちて紅葉の落つるを時と秋はいぬめり 治堅
「(マヤ)

1198 秋もやゝうらがれぬらし朝顔の花さへ空の色としもなき 保合
「(五八ウ)

1199 長月の末のゝを花うら枯れて今はの月ぞ袖に落ちくる 永寛

1200 ものごとに物思はする秋ながらなれてはをしき夕暮の空 三蔭

1201 色かはる藤のうら葉も散りそめてやゝ霜ぐもる松の夕風 茂信

1202 かげうつす河辺のもみち散りにけり水の心も秋やはてつる 富子

1203 菊のうへに心つくしゝ長月も露の日数と成りにけるかな 年足

- 1204 暮秋月
長月の有明の月の影寒みね覚めてきけば山風ぞ吹く
喜蔭
- 1205 暮秋雨
木の間も影さへうとく成りにけり秋も今は有明の月
千代女
- 1206 暮秋風
うら枯れのを花が袖の雨そゝき打ちしをれてもくるゝ秋かな
是満
- 1207 暮秋風
浮雲は行くへもしらぬ夜の雨に秋をつゝまぬ松風の声
花屋濼月
- 1208 暮秋煙
もみぢ葉もかつ散りそひて山風の色よりかはる秋のくれかな
祐之
- 1209 暮秋霧
秋も今末野にたてる夕煙心細さのよそに見えつゝ
恩忠
「(五九才)
- 1210 暮秋霜
さをしかの妻どふ秋も更けぬらん涙かゝらぬ草のはもなし
茂之
- 1211 暮秋霜
秋更くる鹿のうは毛の星月夜さゆるや霜のひかり成るらん
治堅
- 1212 暮秋獣
白菊の花のうへなる夕霜にうつるふ秋をみ初めつるかな
政寿
- 1213 暮秋虫
くれて行く秋をゝしかの声たてゝ明けがた近き月に鳴くなり
香
- 1214 山家暮秋
わかれ行く秋やかなしききりぐす枕の下に声のむせぶは
琴子
- 1215 山家暮秋
百舌鳥のなく片山ざとの櫛もみちひとり散りてや秋はいぬらん
守雄
- 1216 海辺暮秋
しら波も村濃になりぬ磯山の紅葉の秋や沖に出でにけん
惟成
- 1217 春日山秋はてぬらし若草の妻どふ鹿も声のかれぬる
友重
- 1218 旅中暮秋
行く秋のなごりの露の草枕結びすてゝや我もわかれん
信甫
- 1219 鐘声送秋
色もなき野寺のかねの一声や今は秋の行くへなるらん
古樹
長月ばかり、宜門が江戸より、「故郷のたよりかぞふる袖の上に
「(五九ウ)
- 1220 秋の歌の中に
しぐれて落つる初雁の声、また「草枕ね覚めの窓をとふ月もとす
ればうとき宿がちにして」といひおこせけるかへしに
君が袖ぬるともしらで初雁にことやつてんと思ひけるかな
治堅
- 1221 秋の歌の中に
わが袖にしぐれし雨やかげうときね覚めの月のなごり成りけん
治堅
- 1222 朝ぼらけ浅ちが上にかつきゆる露やはかなき月やはかなき
永寛
- 1223 うちわたす夕山陰の薄けぶりとみれば衣うつ声
清澄
- 1224 もみぢ葉もしぐるゝたびにかつ散りて山べさびしく成りまさるかな
昌弘
- 1225 題をさぐりて山路秋行といふ事をよめる中に
故郷に知る人なくはいかゞせん菊をばをらじ山路こゆとも
國本道男
- 1226 山行けばかくもかなしき松かぜに声をかさねて鹿の鳴くらん
喜尾子
- 1227 秋の末つかたものへまかりける時
山のはに日はかたぶきぬもみち狩りしばし時雨をよくとせしまに
「(六〇才)
淇園
- 1228 おなじ頃よし岡の温泉に在りて
ゆあみして月日の行くもしらぬまに山の木の葉は移ろひにけり

おなじ頃つれごとこもりゐて

安歎

1229 音づるゝあらしもすゞしかしのみのひとり起きふす柴の庵に 宣甫

九月盡

1230 虫のねもけふを限りにうらむ也明けなばなげの秋の別れに

亀屋豊子

「(六〇ウ)

【翻刻付記】

886 歌 二句「たゆぶ」 「たゆむ」の誤りか。以下、1123 歌・1223 歌の「たゆぶ」も同様と思われる。

948 歌 二句「■のこゝろを」 「秋のこゝろを」か。

1101 歌 五句「さをしの声」 「さをしかの声」の誤りか。

1165 歌 初句「紅葉の」 「紅葉ゝの」の誤りか。以下、1167 歌・1197 歌の「紅葉」も「紅葉ゝ」の誤りと思われる。

* 原稿受理 令和五年三月十日

** 教養教育部門